大鳳寺跡第５次発掘調査概報

（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第７集）

１９８５

宇治市教育委員会

例　　言

1．本書は、大鳳寺跡第５次発掘調査概報である。

2．調査地は、京都府宇治市莵道西中24番地である。

3．調査組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会	
調査責任者	宇治市教育委員会教育長	岩本昭造
調査指導者	元近畿大学教授	杉山信三
	京都府立桃山高等学校教頭	山田良三
	京都府教育庁文化財保護課記念物係長	中谷雅治
	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター	上原真人
調査担当者	宇治市教育委員会社会教育課主事	杉本　宏
調査事務局	宇治市教育委員会参事	木村光長
	同　社会教育課長	小林　巧
	同　文化係長	伊藤忠正
	同　主事	吉水利明
	同　主事	小西弘子
調査補助員	奥田耕三、猿向敏一、岩本俊也、岸本弘司郎、佐原　耕、上村和也、樋口秀一、鐘方正樹、成清利彦、宝壁恭子、中尾由香里、森武美貴、武内　忠	
調査協力	奈良国立文化財研究所、京都府教育委員会、梅林弘一、西村裕志	

4．本書の編集は杉本が行ない、１～４・６を杉本が執筆し、５を山田良三と杉本が執筆した。

序

宇治市菟道に所在する大鳳寺跡は、昭和46年の宇治市史編纂に伴い最初の発掘が実施され瓦積基壇の発見により宇治市内で始めて確認された白鳳時代寺院として注目をあびた遺跡であります。

宇治市教育委員会では付近の開発増加に伴いこの重要な寺跡の規模・内容等を確認するため、国･府より国宝重要文化財等保存費補助金等の交付を受け、昭和57年度より調査を実施しており本年度はその３年目にあたります。今回の調査では、寺院の中心建物である金堂跡を検出し、当寺跡の内容が一層明らかとなってまいりました。次年度以降も引き続き当寺跡の調査を鋭意実施してまいりたいと考えています。

最後になりましたが、調査を快諾していただきました地主の方を始め、調査にあたり種々ご指導ご協力いただきました関係機関・各位、調査に従事していただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

昭和60年３月１日

宇治市教育委員会

教育長　岩　本　昭　造

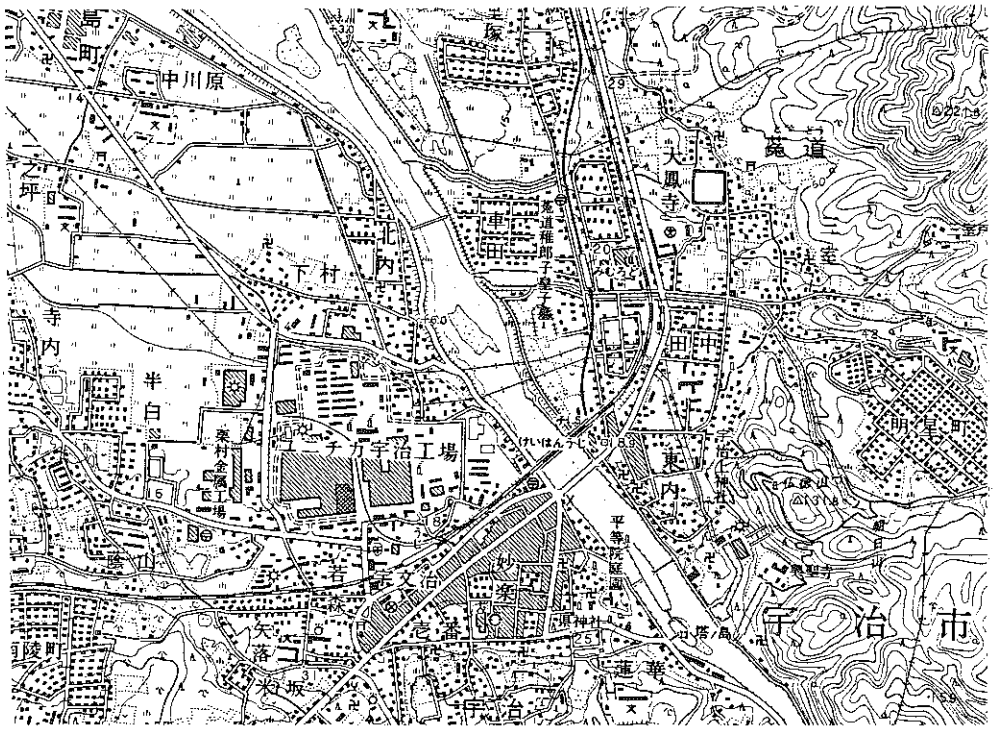
1．は　じ　め　に

宇治市は、市域を概ね南北に貫流する宇治川によって二分されており、その東半部が旧山城国宇治郡に、西半分が久世郡に含まれていた。大鳳寺跡は、この宇治郡域の宇治郷に所在していたのであり、現在の地番は宇治市菟道西中にあたる。

当寺跡を現在「大鳳寺（たいほうじ）」と呼称するのは、この付近が江戸時代に大鳳寺村と呼ばれていたことによる。明治８年（1875）に大鳳寺村は南接する三室村と合併し菟道村となりその村名を終えているが、現在でも西中一帯を通称「大鳳寺」と呼ぶ。このあたりより古瓦がよく出土することは昔から知られていたようであり、文化年間（1804～1817）に畑を開墾していた農夫が「大鳳寺」の名を刻んだ文字瓦を発見したという伝承を伝えるが、その文字瓦は現在に伝わっていない。

大鳳寺跡における考古学的調査は、昭和46年の宇治市史編纂に伴うものを最初として昭和59年度に至るまで通算５次にわたっている。

第１次調査[注1]は、前述したごとく宇治市史編纂に伴うものであり菟道西中24番地を調査している。調査面積がかなり限定されていたためその全容は確認できなかったものの、南北15m



第１図　位　置　図（１：25,000）

程の瓦積基壇を検出し、その規模より塔跡と推定されるに至った。

第２次調査[注2]は、昭和54年に菟道藪里36番地の宇治高等学校第２グラウンド造成工事に伴い調査されたもので、第１次調査で検出した瓦積基壇の西方約50ｍ地点にあたる。明確な遺構の検出はなかったが多量の瓦が出土した。

以上２回の調査は単発的なものであったが、昭和57年度より５年計画で寺院規模・伽藍配置等の実態把握を宇治市教育委員会が実施するようになった。

昭和57年の第３次調査[注3]は、瓦積基壇の北方約40ｍ地点の菟道西中11番地であり、奈良時代の南北溝・土坑等を検出したが、そこからは直接寺院の規模・伽藍配置にかかわるものは見い出せなかった。しかし、総数40点を越える軒瓦が出土し、その検討より当寺跡が白鳳時代に建立され平安時代初頭までは確実に存在していたことが理解されるに至った。

昭和58年の第４次調査[注4]は第３次調査地の北接部がその対象地であり、この時初めて寺域の北・西限を示すと思われる溝ＳＤ402を検出し寺域推定に大きな手懸りを得ることができた。

本年度は第５次調査であり、今回の調査は第１次調査で検出した瓦積基壇を再度調査しその規模、構造を明確にすることを目的とした。その成果は本書の次項以降にその概要を記したごとく、この瓦積基壇が寺の仏像を安置する金堂跡であることが明らかとなり、当寺跡の伽藍配置追究に大きな一歩を踏みだすことができた。

今回の調査を実施するにあたりご協力をいただいた地主の梅林弘一氏、水道・電気等でご迷惑をおかけした西村裕志氏を始め、調査期間中に種々ご教示ご協力いただいた下記の方々に心より感謝する。

佐原　眞・森　隋夫・宮本長二郎・田辺征夫（奈良国立文化財研究所）、平良泰久・奥村清一郎（京都府教育委員会）、高橋美久二・橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、杉原和雄・松井忠春・小池　寛・荒川　史（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、木村捷三郎・江谷　寛（京都市埋蔵文化財研究所）、植山　茂（平安博物館）、星野猷二（伏見城研究会）粟野　謨（田辺町立図書館）、村川俊明（龍谷大学大学院）、安川優子（仏教大学卒業生）、菟道自治会　（順不同、敬称略）

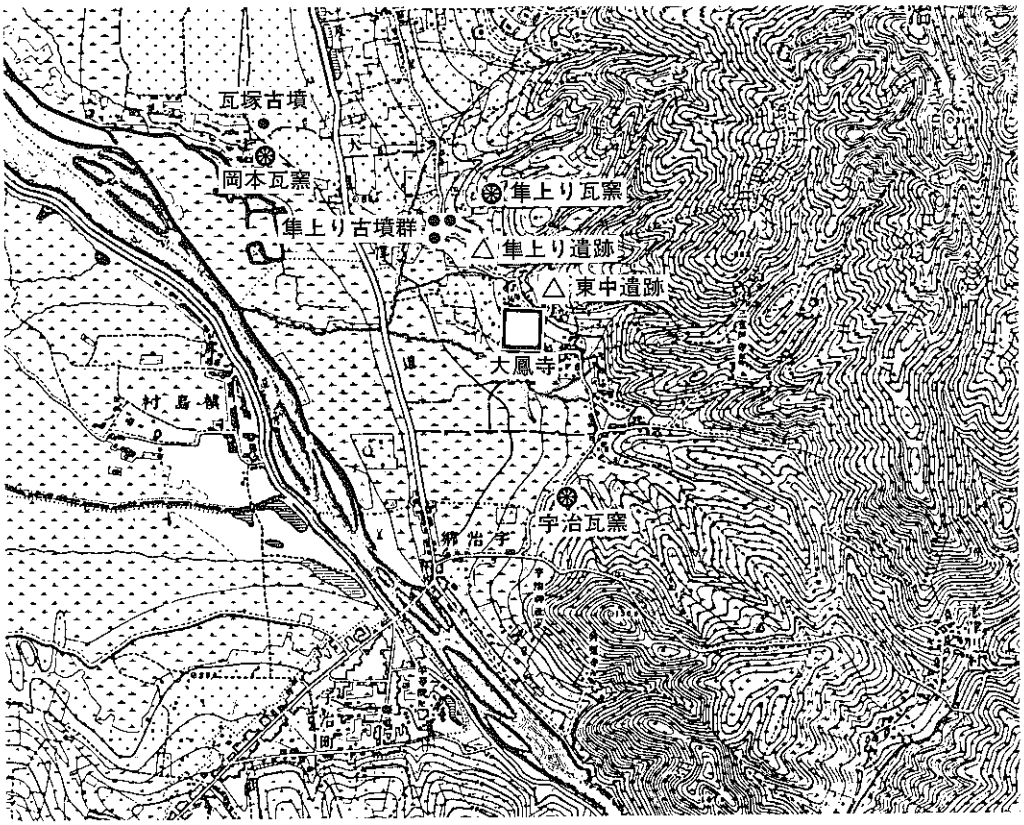
2．遺跡の環境

大鳳寺跡が所在する宇治川東岸の地理的状況は、醍醐・笠取山地と呼ばれる低山（標高200～300m）が南北に連なりその東方約1,000m地点を北西に流れる宇治川との間に形成されている狭長な平野部が生活の主要舞台となっている。現在の宇治川西岸平野部は肥沃な水田地帯となっているが、1941年頃までは巨椋池と呼ばれる巨大な淡水湖[注5]が存在していたのであり、宇治川はかってこの湖にそそぎ込んでいたのである。

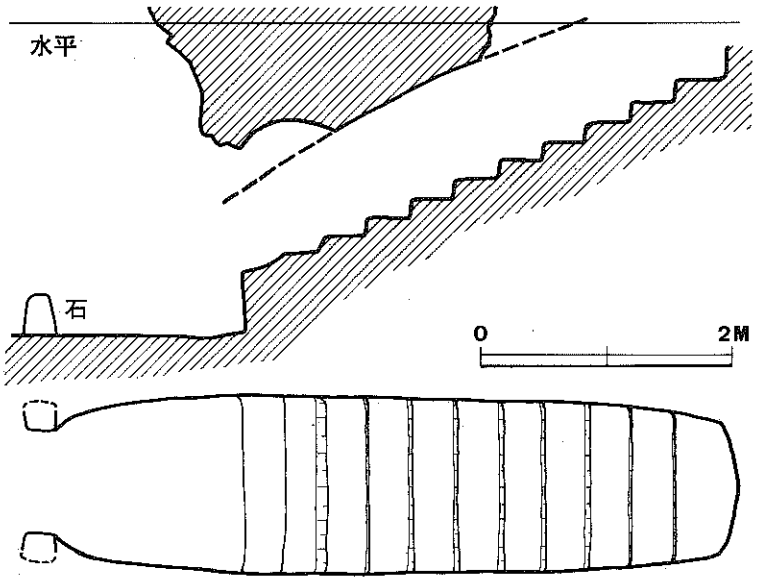
当寺跡の立地は、東方の明星山より流れ出す菟道大谷川が形成した小扇状地上であり標高約30m程を測る。

大鳳寺跡周辺の考古学的環境は、北接する菟道隼上り地域の大型開発に伴い苦肉にも明確となって来ている。その成果を古墳時代後期から奈良時代に限って概観する。

当寺跡周辺の後期古墳として、北西方約400m地点に位置する隼上り古墳群[注6]がある。この古墳群は横穴式石室を内部主体とする3基以上の円墳より構成されており、時期的には6世



第2図　周辺遺跡分布図（明治21年仮製図，1：30,000）



第3図　宇治瓦窯実測図（注8文献より，一部加筆）

紀後半より7世紀にかけて築造されている。宇治川東岸域における後期古墳には他に瓦塚古墳、妙見古墳等が付近に存在するが、群を明確にするものはこの隼上り古墳群以外に本幡古墳群がある。木幡古墳群は現在宮内庁管理の陵墓となっているため不明な部分が多いが、数十基単位の横穴式石室墳が含まれており南山城最大規模の後期群集墳となっている。

飛鳥時代の遺跡では北方約400ｍの丘陵斜面に築かれている隼上り瓦窯跡[注7]が著名である。この遺跡は7世紀前半に大和豊浦寺創建瓦を焼成した瓦窯跡であり、大鳳寺跡の建立前史を考えるうえで重要な遺跡である。大鳳寺跡の創建瓦を焼成した瓦窯跡は大鳳寺跡の南方500ｍの丘陵斜面に存在する宇治瓦窯（山本瓦窯）[注8]であり、全長5ｍ程の有階段地下式の窯跡が1基検出されている。また、奈良～平安時代にかけての補修瓦の一部を焼成した瓦窯跡として大鳳寺跡西北方約1,000ｍ地点の台地端部に存在する岡本瓦窯[注9]が想定されているが未調査のため具体的内容は不明である。

大鳳寺跡を取りまく奈良時代集落として隼上り遺跡と東中遺跡がある。隼上り遺跡[注10]は大鳳寺跡北側を東西に流れる大鳳寺川の対岸丘陵上にあり、総数20棟前後の掘立柱建物が検出されている。主体となる時代は奈良時代ではあるが、前述の隼上り瓦窯跡関係遺物が若干出土しており集落の形成は飛鳥時代に遡るものと考えられている。東中遺跡[注11]は大鳳寺跡に東接する標高50ｍ程の台地上に立地しており奈良時代の掘立柱建物数棟が検出されているが、その全容は不明である。この2遺跡が現在内容の知れるものであるが、当寺跡内からも飛鳥時代に比定される須恵器が出土[注12]しており、当寺跡周辺にまだいくつかの集落を予想することが可能である。

3．調 査 の 経 過

今回の調査は、第１次調査で検出した瓦積基壇の内容を確認することを目的として実施した。調査地番は苑道西中24番地である。

調査地の現状は、北半分が竹林・南半分が荒廃茶園である。基壇の位置は現地形の１ｍ程の隆起と、竹林と荒廃茶園との境を東西に走る溝の土層観察より確認できた。

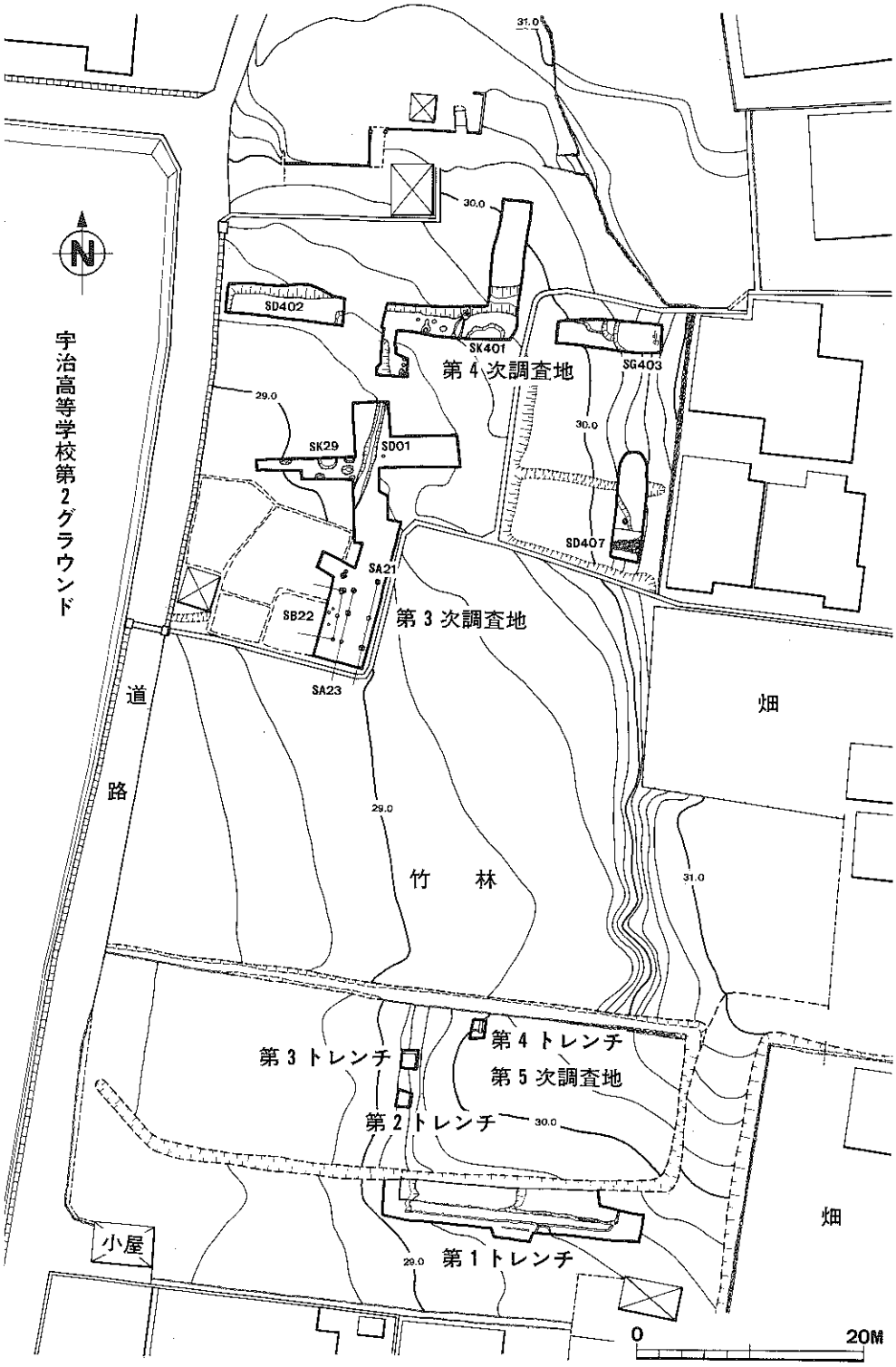
調査はまず地形測量から始めた。調査地の地形測量終了後、荒廃茶園内に基壇南辺全体を確認することを目的とした第１トレンチ（20ｍ×５ｍ）、竹林内に西辺の一部を確認するため第２・３トレンチ（２ｍ×２ｍ）、北辺の一部を確認するため第４トレンチ（２ｍ×３ｍ）を設定した。その後第１トレンチは基壇東南角確認のため東へ４ｍ拡張し、調査総面積は124㎡となった。また、第２トレンチは第１次調査の再調査トレンチである。

掘削はまず第１トレンチ内で１ｍ×１ｍのグリッド３ヶ所を設定し、土砂の堆積状況、遺構埋没状況等を確認した。第１トレンチでの基本的な層序は、基壇上で層厚0.3ｍ程の耕作土がありその直下に基壇版築土が存在する。基壇外では耕作土下に層厚0.3ｍ程の瓦を多量に含む淡褐色土層がありその下は暗褐色混礫土の寺院整地層である。瓦積基壇及び下成基壇等はこの淡褐色土層によって被覆されている。したがって、最上層の耕作土を機械力によって排除し、その後もっぱら人力により基壇の検出に努めることとした。基壇検出後は実測と写真撮影を行い、基壇構造の確認のため数ヶ所において下成基壇の断ち割りを実施した。基壇本体については基壇南半部を溝が東西に走っているため、その土層観察より瓦積基壇・版築の状況について充分観察可能であった。

第２・３トレンチでは基本的な調査経過・土層状況等は第１トレンチと同じであるが、トレンチ設定の目的が瓦積基壇の基壇辺の検出であったため基壇上面は検出していない。また、掘削についても一切機械力を使用せず人力のみにたよった。

第４トレンチでは瓦積基壇の一部が崩壊している個所があり、瓦積の状況を最も良好に観察できた。基壇北辺にも南辺同様に下成基壇を付加しており、その全体確認のためトレンチを北に若干拡張したが、地割の石垣が至近に存在していたために拡張を中途で断念し下成基壇の幅を検出するに留めた。

発掘調査終了後は、瓦積基壇の崩壊の危険性のある個所に土嚢をつめ埋めもどしを実施し一部残していた周辺地域の測量を行ないすべての現地調査を終了した。


31.0
30.0
N
SD402
SK401
第4次調査地
SG403
29.0
30.0
SK29
SD01
SD407
SA21
SB22
第3次調査地
SA23
宇治高等学校第2グラウンド
道
路
畑
29.0
竹　林
31.0
第4トレンチ
第3トレンチ
第5次調査地
第2トレンチ
30.0
畑
小屋
29.0
第1トレンチ
0
20M

第4図　調査地配置図

4．遺　　構

今回検出した遺構は東西19.74m、南北16.10mの規模を持つ瓦積基壇1棟であり、南・北辺に幅約0.9mの下成基壇を付設している。基壇の方位は北に向って7度程東に偏している。この遺構は第1次調査時において塔跡と想定されていたが、今回の調査によりその平面形が長方形であること、塔跡にしては規模が大きすぎる事等から金堂跡と推定するに至った。基壇構築時の単位尺を1尺＝30.3cmとした場合、基壇の東西65尺、南北53尺となり、下成基壇を含めた南北尺は57尺となる。

基壇の遺存状況は、第1トレンチでは東半部が近世の削平が深く及んでおり、瓦積数段を残すにすぎなかった。特に基壇東南端及び東辺は遺存状況が悪く瓦積基壇は一切存在せず、基壇盛土と瓦積基壇の裏込土よりその位置を確認できたにすぎない。したがって前述した基壇東西長は検出長にかって存在したはずの東辺の瓦積基壇東端までの幅を加えたものとなっている。下成基壇も東半部の状況は良好でなく、外装の石列及びその上面は幾分か削平を受けていた。これに比べ西半部は幾分か状況は良く、瓦積基壇が最も良好に遺存していた所で高さ0.6m程あり、下成基壇の外装石列も比較的良好に遺存していた。基壇上面の調査を実施したトレンチはこの第1トレンチのみであるが、基壇そのものはすでに半分程が削平を受けていると考えられ、礎石等の据え付け痕跡は確認できなかった。

第2・3トレンチでの瓦積基壇の遺存状況は各トレンチの中で最も良い方であり、遺存高0.7m程を測る。特に第3トレンチの瓦積は凹凸が少なく垂直な壁を保っていた。また、第2トレンチでは瓦積の中でその積み方が乱れている部分が存在し、一部補修を実施した痕跡と思われる。

第4トレンチでは、瓦積基壇が高さ0.9m程遺存していたが、下成基壇より上部の瓦積の一部が崩壊しており、トレンチ幅のせまさもあって瓦積の状況は明確には把握し難い面があった。

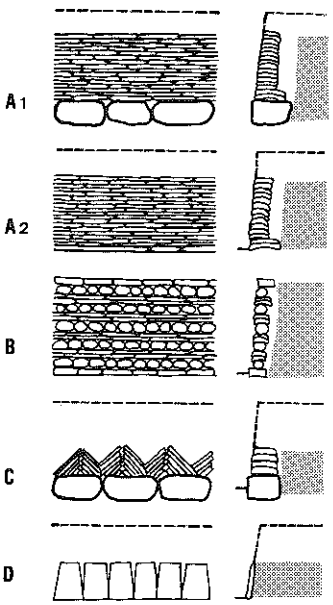
以上のように、この金堂基壇跡は西辺部に向って良好な状況が看取できるのであるが、これは、基壇の立地する整地面が東より西に向って傾斜している事実と関係があるように思われる。

では、以下基壇の細部について項目ごとにのべる。

基壇の外装

金堂基壇跡の外装は、すでにのべてきたとおり瓦を積みあげた「瓦積基壇」と呼ばれるものである。瓦の積み方は寺院整地面から直に瓦を積みあげており、所謂「地覆石」と呼ばれ

るものは使用していない。使用されている瓦は平瓦がほとんどであり、それを半載ないしは半載以下に割り[注13]平瓦側面を正面に並べる所謂平積を基本としている。しかし、実際は平瓦を木口積としているもの、半載ないしそれ以下の丸瓦・軒平瓦の破損しているもの等もかなりの比率で認められるのであり、第2トレンチでは検出した瓦積総数約160枚のうち平瓦完形3枚、平瓦木口積約10枚、丸瓦平積4枚平瓦平積のうち破載面を正面としたもの約20枚となっている。これらは、特定な部分のみに集中するのではなく、瓦積基壇全体にまんべんなく認められるのであり、最下段においても丸瓦・軒平瓦の破損したものが存在している。瓦積に使用されている軒平瓦は必ずしも瓦当面を正面に向けてはおらず、装飾的効果としての使用は考え難い。



第5図　瓦積基壇型式図
(注14文献より、一部加筆)

瓦積を行なっていく場合、瓦と瓦の間に粘土を置きながら積みあげたらしく、所々に黄色粘土が遺存していた。ようするに大棟の熨斗瓦を積みあげる要領で瓦積が構築されたことが理解できる。また、瓦積と基壇盛土との間に幅0.3m程の裏込土が存在するが、この裏込土も多くの部分で黄色粘土が認められ、裏込めと瓦間への粘土の充塡が同一行程で行なわれたことを予想することができる。

以上のような特色をもつ瓦積基壇は田辺征夫の分類[注14]にしたがえばA_2形式に該当するが、この形式の場合、最下部に1枚か2枚の完形平瓦を並べその上に半載平瓦を積み重ねる事が一般的であるのに対し、当寺跡の場合最下部より半載瓦を使用している特色を持つ。

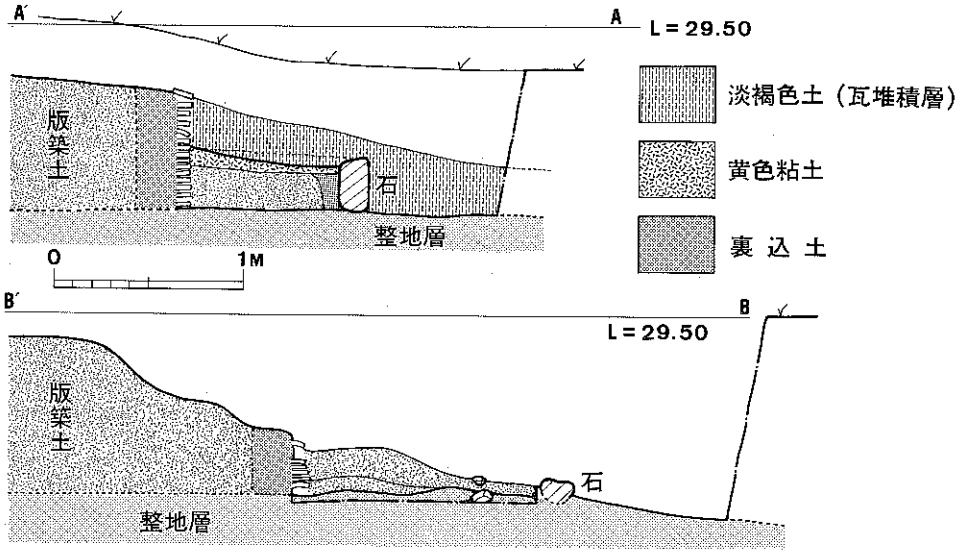
基壇の土盛

基壇の構築は整地層である暗褐色混礫土より行なわれており、地面を掘り凹め地下より版築し基壇を造りあげる「掘り込み地業」は行なっていない。

基壇は一応版築によって築きあげたらしく、土は硬くしまっている。しかし、その断面には通常の版築のような粘土や砂の互層は全く見受けられず、礫を含む暗黄褐色土の単層である。これは暗黄褐色土を一定の厚さずつくり返しつき固めた結果として単層の版築基壇ができあがったものと考えられ、版築の簡略なものとすることができる。また、版築土の中には一切遺物は含まれていない。

下成基壇

下成基壇は瓦積の基壇本体の南・北辺に付設された幅0.9m～1.0m、高さ0.3mの施設であり、当寺跡金堂基壇の大きな特色となっている。



第6図　基壇南辺断面図

下成基壇の構築順序は、瓦積基壇完成後、幅0.7m、高さ0.2m程に版築を行ない下成基壇の土盛を造りあげる。後に正面に高さ0.3m程、幅0.4m程の河原石を面をそろえて並べ下成基壇の外装とし、上面外装として黄色粘土を厚さ0.1m程敷き完成させている。したがって下成基壇高の部分だけ瓦積基壇はかくれてしまうこととなり、その瓦積段数は西端部で約10段、東端部で約5段となっている。また、下成基壇土盛の版築土は基壇本体と同様な土であり全く遺物は検出されなかった。下成基壇は第1トレンチでその全体を検出しているが、瓦積基壇南辺端よりそれぞれ1m程短い形で確認した。しかし、これはその崩壊によるものと考えられ、実際的には瓦積基壇南辺全長と等しい下成基壇であったと思われる。

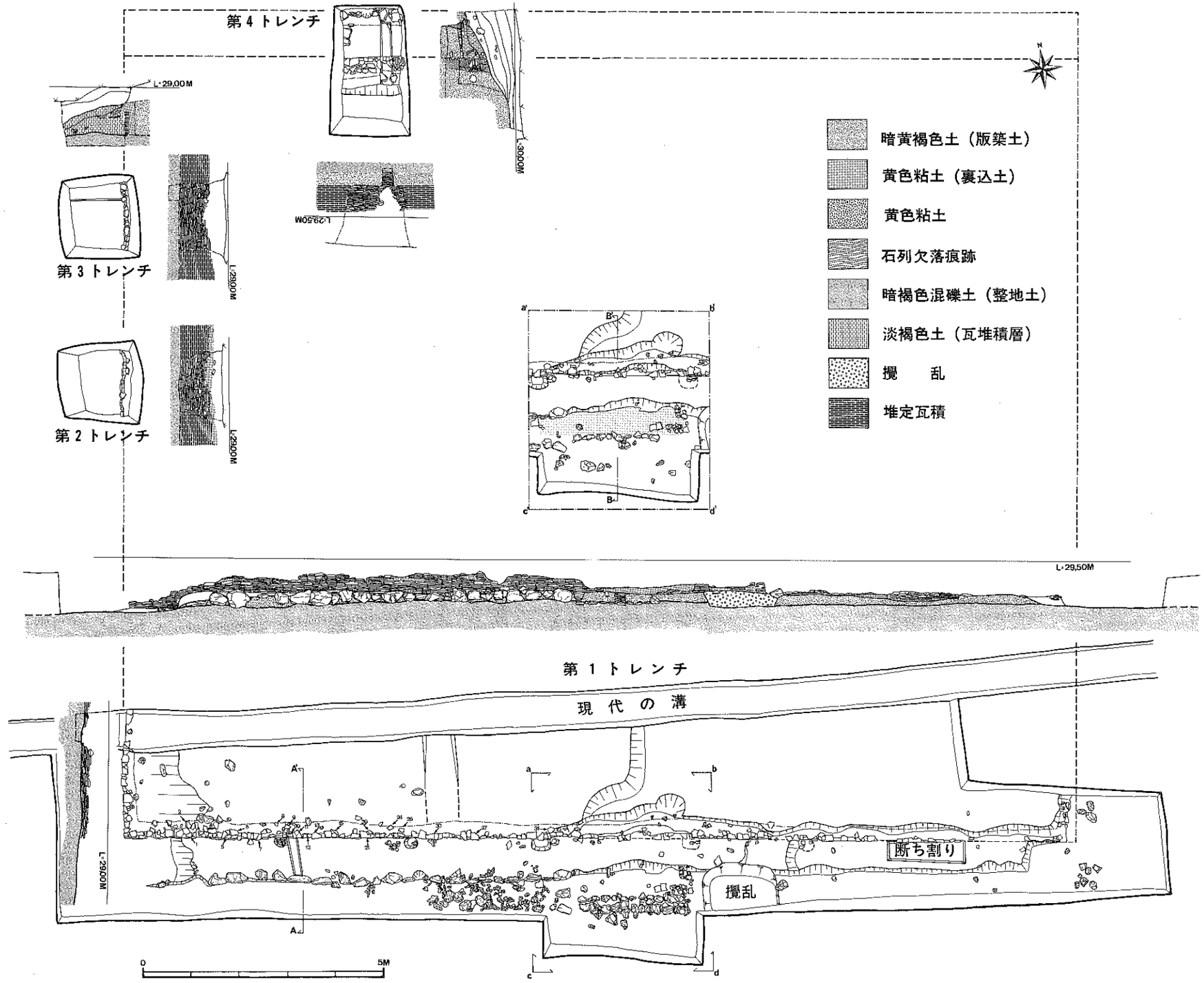
下成基壇上面の瓦積との境付近に径0.2～0.3m程の杭穴が約2.7m間隔で計5ヶ所検出された。この杭穴は下成基壇の上面外装である粘土層上で検出可能であり、下成基壇構築後のものである。杭穴には暗褐色土の埋土とともに瓦片・礫等が混在しており、瓦片の中には縄タタキを有するものがある。

階　段

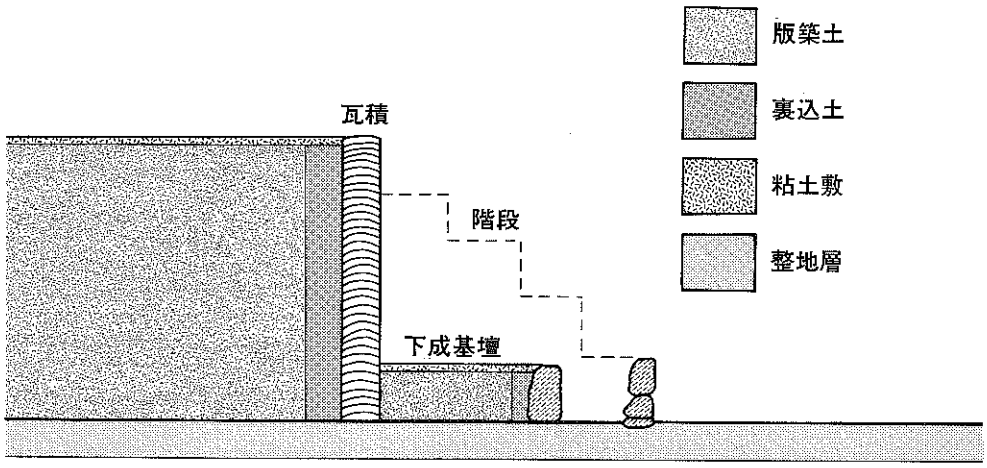
第1トレンチの基壇中央部で階段痕跡を検出した。その状況を確認できたのは最下段のみでありそれ以上は不明である。

検出時の状況は、下成基壇南辺より0.6m南で整地層上に長さ0.2m、厚さ0.15m程の偏平な河原石が下半を整地層中にたたき込まれた状況で東西に基壇と並行して12個分、全長1.8m確認され、その列に南接してそれよりやや大ぶりの河原石が東西に2列分整地層より若干遊離しているものであった。

これは、階段第1段目の石組の一部が最下段の石列を原位置に留め上2列分が南に倒壊し


第4トレンチ
第3トレンチ
第2トレンチ
第1トレンチ
現代の溝
断ち割り
攪乱
暗黄褐色土（版築土）
黄色粘土（裏込土）
黄色粘土
石列欠落痕跡
暗褐色混礫土（整地土）
淡褐色土（瓦堆積層）
攪　乱
堆定瓦積
L=29.00M
L=29.50M
L=30.00M
0
5M

第7図　金堂基壇実測図



第８図　基壇南辺断面復元推定図

た状態と考えられた。したがって倒壊した石列を除去しつつ下成基壇より階段部に向って南北に断ち割りを行ないその土層を観察した結果、下成基壇の版築土が階段第１段目の石列に向って薄く広がっていることが理解できた。この版築土の広がりは東西に約３ｍ程あり、この範囲が階段の幅である可能性が強い。このような状況を階段と認め基壇南辺におけるその位置を計測すると、基壇西端より階段西端までが8.7ｍ、同様に東端同志が8.2ｍとなり0.5ｍ程階段は東に偏することとなる。しかし、現実には版築土の広がりは不明瞭でありその東・西端を確定することは難しい。

階段第１段目の高さを、倒壊した石積みから復元すると0.35ｍ程となり下成基壇よりもわずかばかり高くなる。２段目以上の状況については全くその状況を確認できる部分はないが、下成基壇の階段部には特に変った様相はなく、階段の付設は基壇構築の最後に実施されたことが想定できる。また、階段部西側の下成基壇外にやや大形の礫が集中する部分があるが、これらも階段部分に使用された可能性がある。

基壇の上面外装

基壇の上面の仕様については、基壇そのものがかなり削平を受けているため不明ではあるが、遺物中に磚が全く出土していない点と下成基壇の上面外装が粘土張りであることから下成基壇と同様に粘土等により外装した可能性が考え得る。

5．遺　　物

今回の調査で出土した遺物には、瓦を主体に土師器・須恵器・瓦器・彩釉陶器・近世陶磁器・鉄製品・石製品等があり、総数コンテナ箱に100箱分に及ぶ。その内瓦以外の遺物はわずかにコンテナ１箱分である。

ここでは第１次調査出土遺物の概要もあわせ報告する。

(1)　土　　器　　類

土器類はすべて瓦の堆積層等所謂包含層中よりの出土であり遺構よりの一括遺物はない。また、現在土器類の整理作業が未了であるため特筆すべきものの概要を記すに留めたい。

彩　釉　陶　器

奈良時代の二彩・三彩陶器の小片が第１トレンチ基壇外で数片出土している。器形は壺と考えられ、口縁部・体部片である。２個体以上と思われる。

水　　瓶

水瓶の注口部が第１次調査で出土している。口縁部と体部との接続部分はヘラにより面取りを行なっている。須恵質である。

(2)　瓦　　類

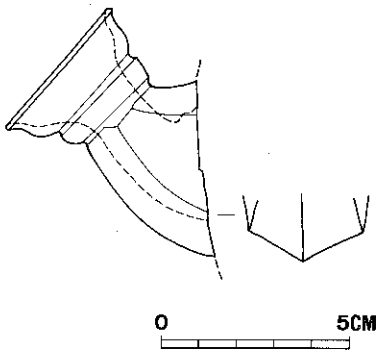
今回の調査で出土した瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦がありそのほとんどは平瓦で占められている。

軒　丸　瓦

大鳳寺跡出土の軒丸瓦の型式は現在ＮＭ０１～ＮＭ０７までの７型式が知られており、その特徴は下記のとおりである。

（ＮＭ０１）　複弁８弁蓮華文軒丸瓦。所謂川原寺式であり当寺跡の創建瓦である。

（ＮＭ０２）　単弁16弁蓮華文軒丸瓦。平城宮6133－Ｈと同笵。奈良時代の補修瓦。



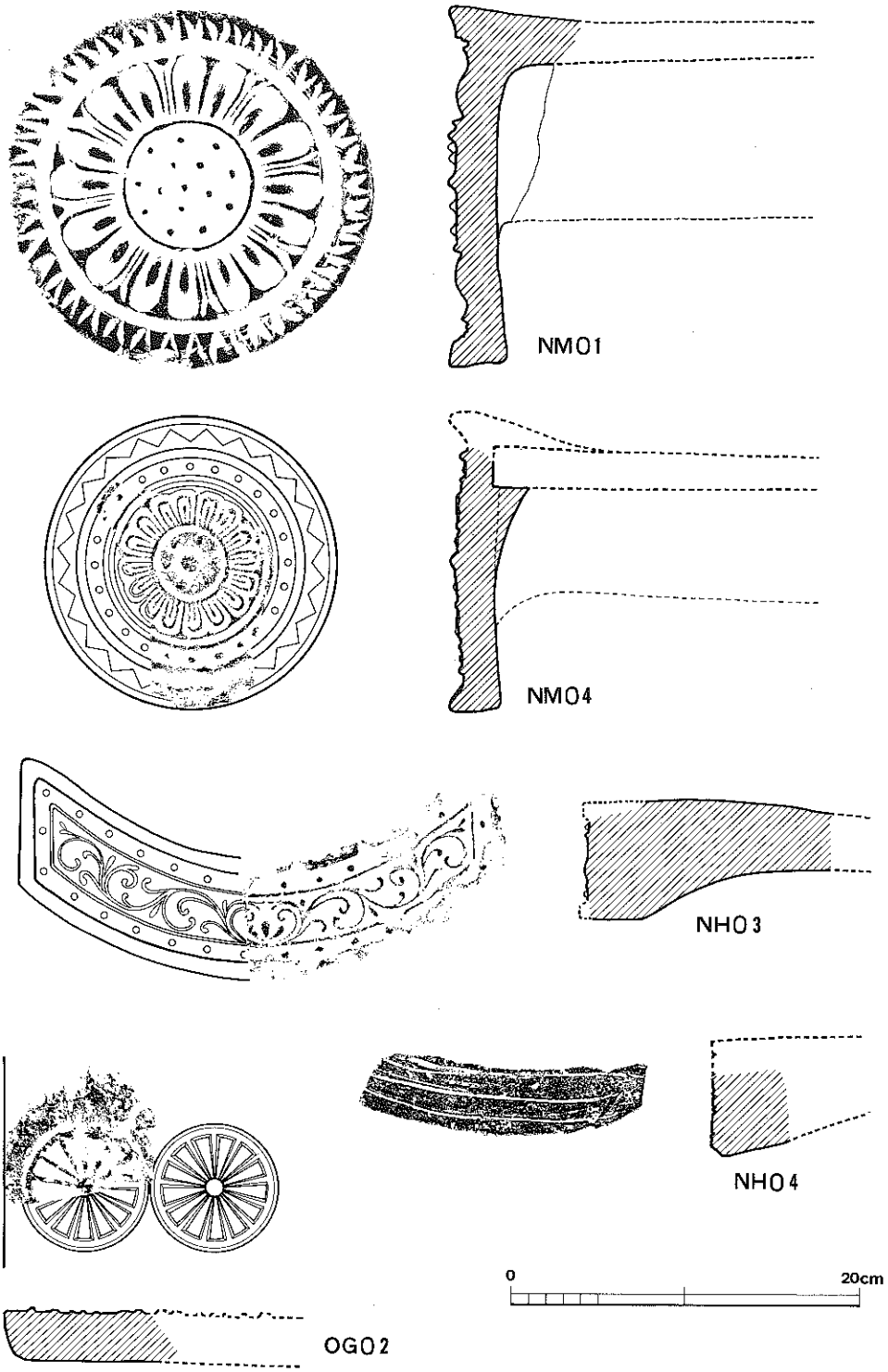
第９図　水瓶実測図

（ＮＭ０３）　複弁８弁蓮華文軒丸瓦。平城宮6225系。奈良時代の補修瓦。

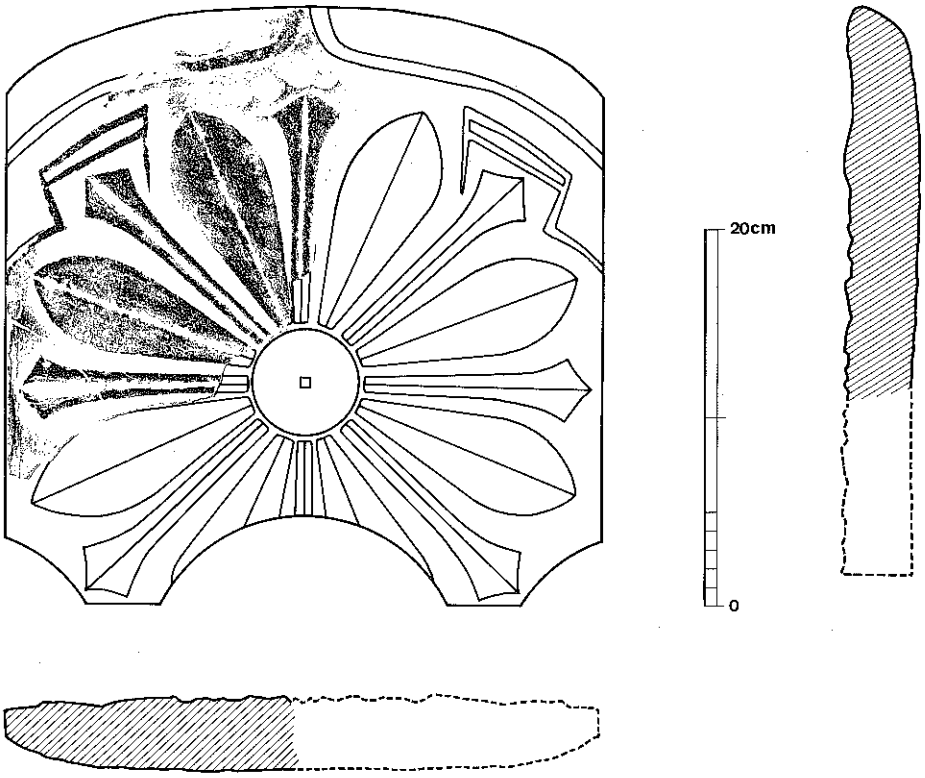
（ＮＭ０４）　複弁８弁蓮華文軒丸瓦。平城宮6282系。奈良時代の補修瓦。

（ＮＭ０５）　複弁８弁蓮華文軒丸瓦。中房に「大伴」銘、平安時代の補修瓦。

（ＮＭ０６）　単弁12弁蓮華文軒丸瓦。平安時代の補修瓦。



第10図　出土軒瓦・鬼瓦実測図



第11図　鬼瓦（OG01）実測図

（ＮＭ０７）　複弁８弁蓮華文軒丸瓦。平安時代補修瓦。

今回の調査で出土した軒丸瓦56個体中不明なもの11個体以外はすべてＮＭ０１である。第１次調査においても出土した軒丸瓦のうちＮＭ04が１個体以外はすべてＮＭ０１である。

軒　平　瓦

当寺跡の軒平瓦は下記の４型式が現在までに確認されており、今回はＮＨ０１・ＮＨ０３・ＮＨ０４の３型式が出土している。出土総数33個体中ＮＨ０３・ＮＨ０４は各１個であり、他はＮＨ０１である。以下型式別の特徴を記す。

（ＮＨ０１）　重弧文軒平瓦。四重弧と五重弧がある。段顎。ＮＭ０１とセット。

（ＮＨ０２）　均整唐草文軒平瓦。平城宮6663－Ｃと同笵。ＮＭ０３とセット。

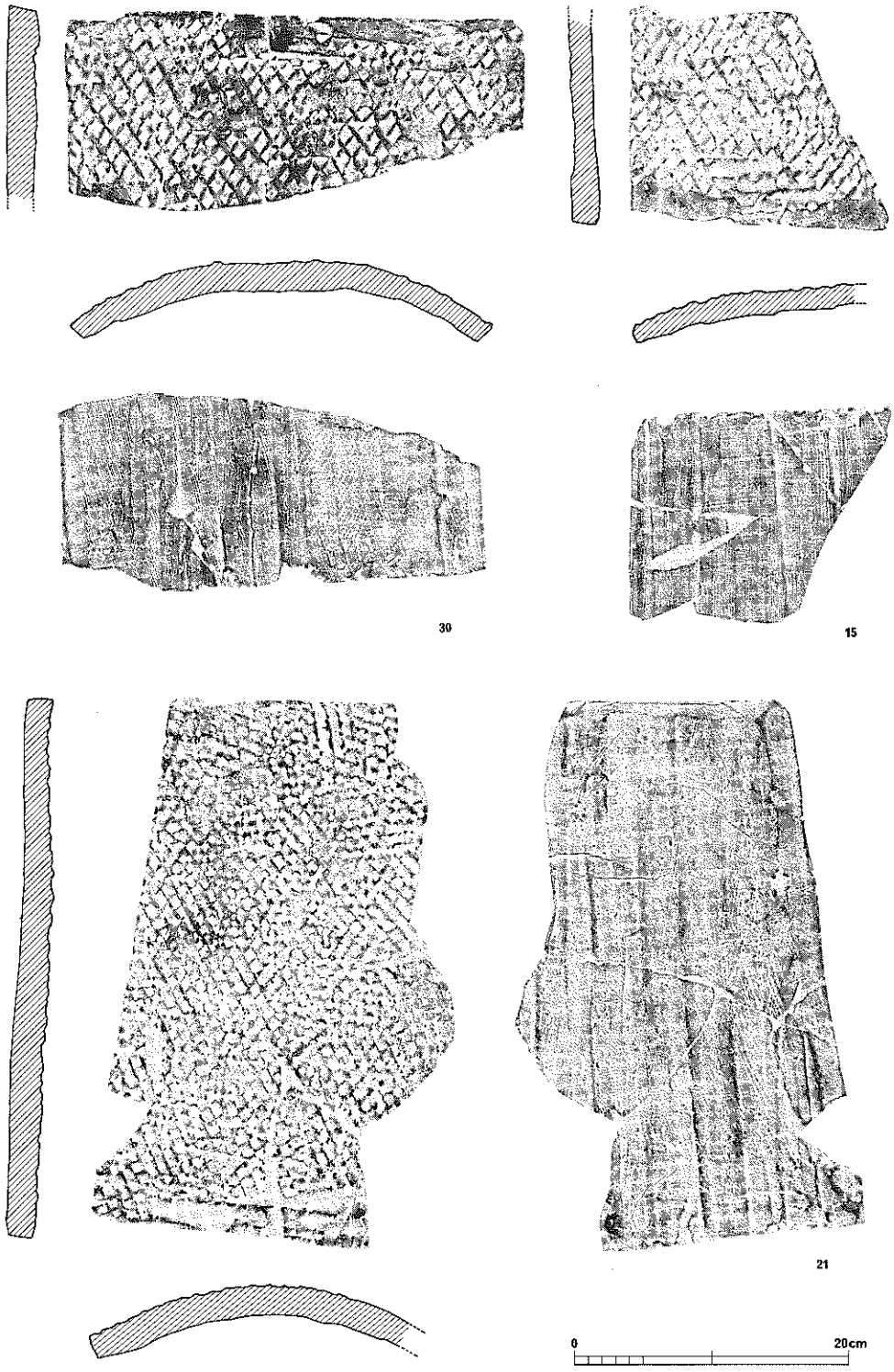
（ＮＨ０３）　均整唐草文軒平瓦。側面に縄叩痕跡。西賀茂瓦窯製か。平安時代補修瓦。

（ＮＨ０４）　ヘラ描重郭文軒平瓦。奈良時代以降の補修瓦。

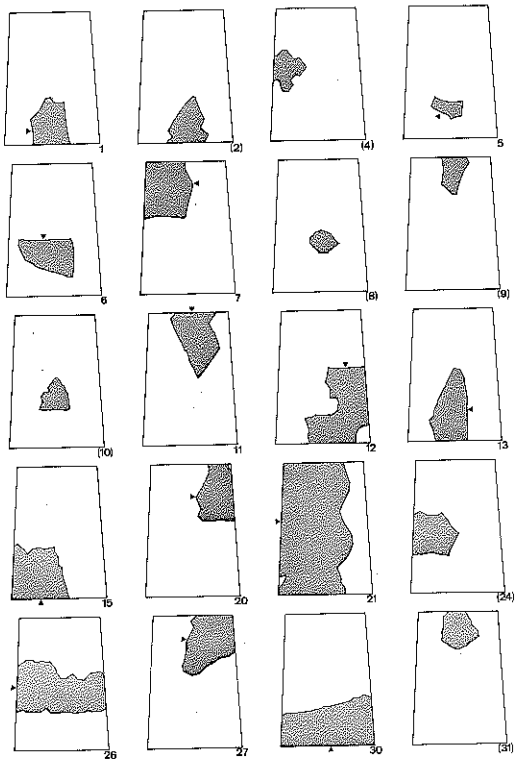
鬼　　瓦

第１トレンチで鬼瓦が２型式各１個体出土した。

（ＯＧ０１）　弁央が凹む８弁蓮華文を主文とするもので剣菱形の間弁をもつ。弁・間弁



第12図　瓦積基壇使用瓦実測図



第13図　基壇使用平瓦破片度概念図
（番号は第７図と対応。▲＝正面。（　）＝裏込土内）

は中房部より独立している。上半部に幾何学文様を施す。

（ＯＧ０２）　復元径7.5㎝の車輪文を複数施すものと思われるが小片のため詳細不明。

平　　瓦

平瓦は大きく格子叩きを凸面に残すものと縄叩きを凸面に残すものがあるが、前者がほとんどである。整理未了のため詳細不明。

丸　　瓦

丸瓦は凸面整形痕をすべてナデ消しているが、端部を所謂行基式にするものと玉縁とするものの２者がある。前者が多く創建瓦として平瓦格子叩きのものとセットをなすと考えられる。

瓦積基壇使用瓦

瓦積基壇に使用された瓦は前章でのべたごとく、平瓦を主体に丸瓦・軒平瓦である。

平瓦は確認し得たものすべてが凸面に格子叩き痕跡を有すものである。また、その裏込めに使用されている平瓦も同様である。これらの瓦の破片度は高く、半載平瓦は極めて少ない。また、木口積用に半載したかと思われるものも存在する。

丸瓦は行基式のみであり、その破片度は平瓦より高く概ねは半載されている。

軒平瓦はすべてＮＨ０１のみである。

これらの基壇使用瓦が金堂に葺かれた瓦と同一窯製品か否かについては、基壇使用瓦をすべて取りあげることが不可能であり不明である。

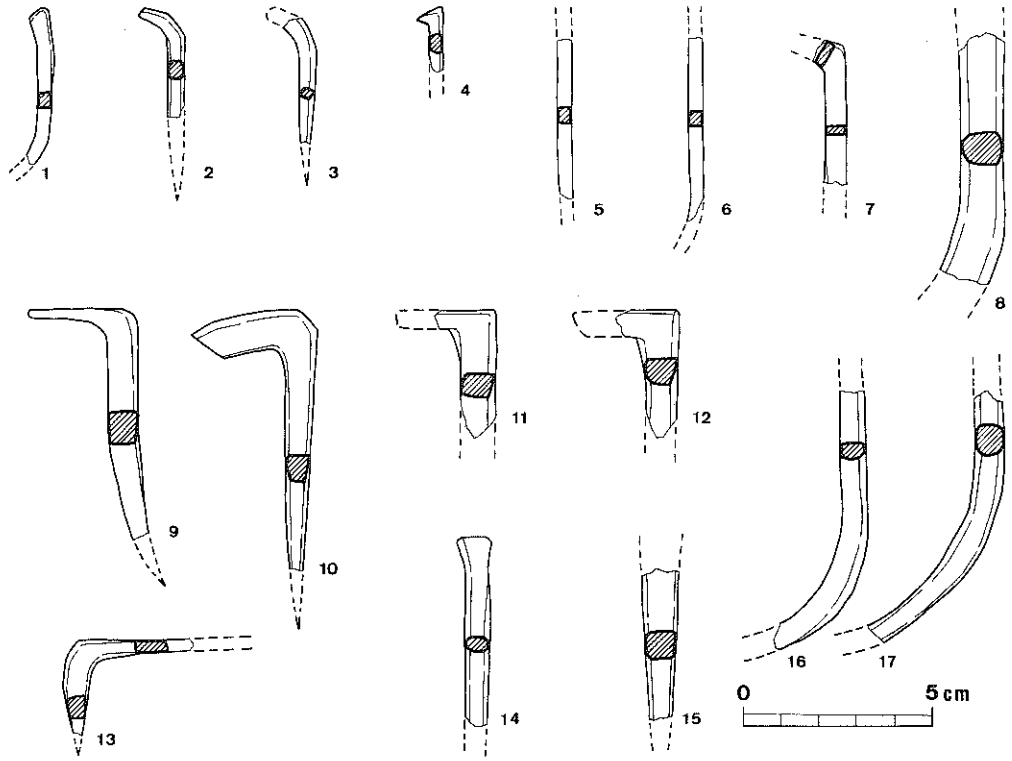
(3)　鉄　製　品

土器類・瓦類と伴に若干の鉄製品が出土している。

釘

鉄製品の中で最も出土数の多いものは釘である。出土総数は30個体程あるが錆化が著しく全形を窺える個体は少ない。以下にその分類を記す。

（釘Ａ、第14図９～12）　釘頭を直角に折り曲げるもので、針部は断面方形である復元長７～8.5㎝。



第14図　鉄製品実測図

（釘Ｂ、第14図２・３）　釘頭がゆるやかに曲がるもので、針部は断面方形である。復元長５cm程の小型の釘である。

（釘Ｃ、第14図１・４・14）　釘頭が方頭形をなすもので、針部は断面方形である。小型のものと大型のものの２種がある。

鎹

鎹と思われるものがある（第14図13）。 軸部は断面長方形をなす。また、７・８も鎹の可能性がある。

6．ま　と　め

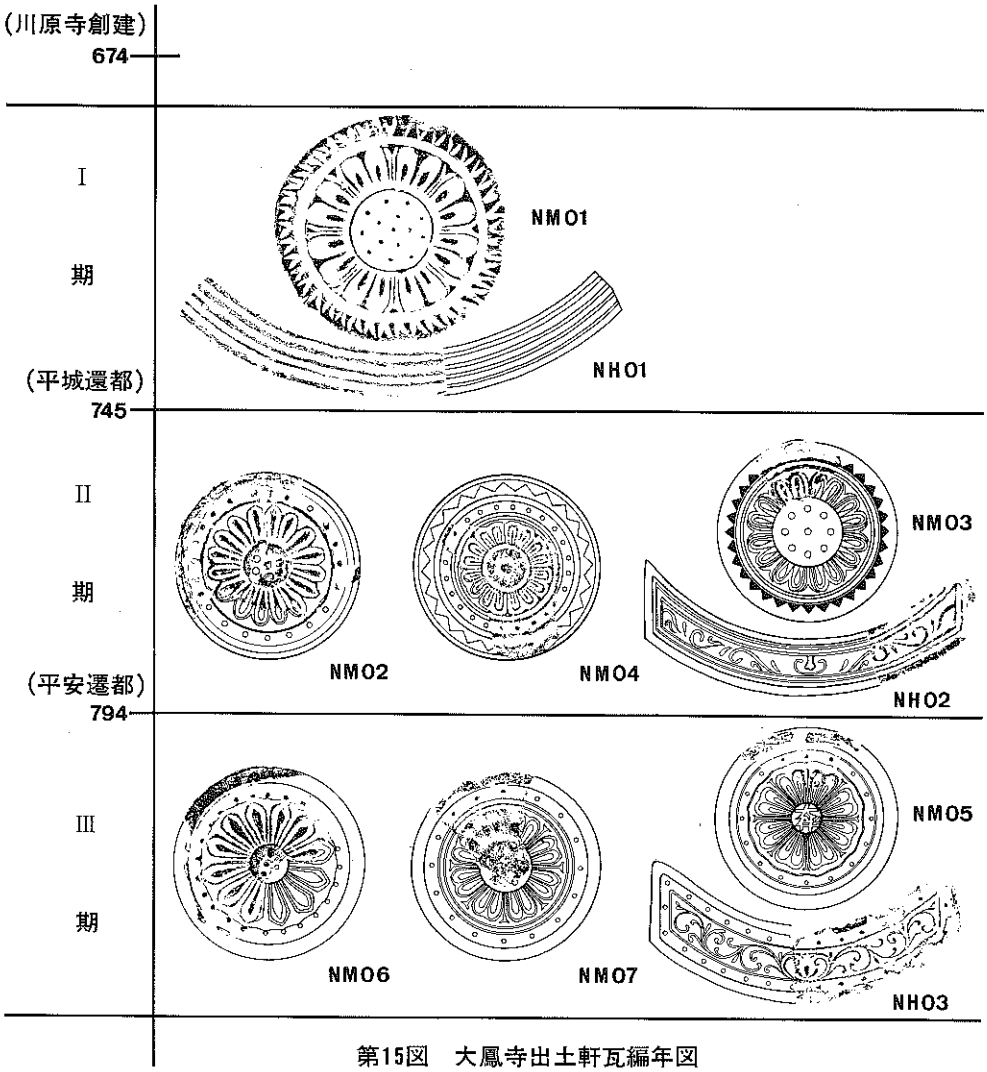
伽藍配置　過去の調査事実より、菟道西中周辺の道路が寺域を示す可能性が高いことをすでに指摘[注15]し、今回の調査によりこの瓦積基壇が金堂基壇であると確認されるまでは当寺跡の伽藍配置は東に金堂、西に塔を配置する法隆寺式伽藍配置を予測していたが、結果として当寺跡は東に塔、西に金堂を置く「法起寺式伽藍配置」である可能性が強まった。

法起寺式伽藍配置は南山城諸寺院においてよく採用されている伽藍配置であり、山城町の高麗寺、城陽市の久世廃寺がその代表例である。

創建の時期　寺跡より最も高比率で出土する軒瓦がその創建瓦と認定できるとした場合、大鳳寺跡については、軒丸瓦がＮＭ０１、軒平瓦がＮＨ０１、平瓦が格子叩きのもの、丸瓦が行基式のものとなる。ＮＭ０１はその標式例である大和川原寺出土のものと比べその文様の退化が認められ後出的である。大和川原寺がいつ創立されたかは議論のあるところだが、仮に天武三年（674）には成立していたとすれば[注16]、当寺跡は７世紀後半に建立されたと考えられる。また、奈良時代・平安時代前期の瓦も若干出土しているところから、それぞれの時期に補修が実施されたことが想定できる。このような補修瓦は金堂跡よりもむしろ北辺部域で多く検出されており、金堂はＮＨ０３が示す平安時代前期頃までは良好な状況で存在していたことが考え得る。

廃絶の時期　当寺跡の下限を考える資料に『東寺文書』がある。この中の仁平二年(1152)三月日付「東寺御影供菓子支配状」[注17]の中に「大鳳寺」の名が見え、この大鳳寺が当寺跡を示すと考えれば平安時代末頃は存在していたことになる。しかし、瓦の検討では平安時代前期までは確認でき、土器の検討[注18]からは10世紀中頃までがその存続が予測できる時期であり『東寺文書』の示す年代よりも200年程遡ることとなる。今後、綿密な検討を必要とする課題である。

瓦積基壇　金堂跡の瓦積基壇使用瓦がすべて当寺跡創建時のもので占められていることはすでにのべたとおりである。このことは素直にその事実を受けとめれば、建立より廃絶まで瓦積基壇は大きな改修ないし補修を受けず存続したこととなる。しかし、その積み方は粗雑な感をまぬがれず瓦そのものも小片化している。瓦積基壇が基本的には大棟の造りと同様なものとすればこのような状況は幾度かの改修をくり返して来た結果とみることも可能である。金堂跡出土の瓦に補修瓦が少ない事実を考慮すれば、基壇の改修時にそのような後の瓦が混入する可能性は少なかったのかも知れない。



第15図　大鳳寺出土軒瓦編年図

下成基壇　当寺跡の金堂基壇の特徴に基壇南・北辺に下成基壇を有することがあげられる。この下成基壇の付設は工程的には瓦積基壇完成後であるが、それが即ち時間的な隔たりを示すのか否かについては、瓦積基壇が当初の形を保っているか否かの問題と深くかかわり、即断できない。今後の検討を要する。

以上のように、2～3問題となる点を簡略に記したが、まだ整理が未了であり今後の調査成果の蓄積をまって明らかとしたい。

〔注〕

注１　宇治市『宇治市史』第１巻、昭和46年。

注２　大鳳寺遺跡発掘調査会により調査。

注３　杉本　宏『大鳳寺跡第３次発掘調査概報』（宇治市教育委員会、昭和58年）。

注４　杉本　宏『大鳳寺跡第４次発掘調査概報』（宇治市教育委員会、昭和59年）。

注５　巨椋池の規模は、東西８km、南北５km、周囲16km、面積794haであった。

注６　京都府埋蔵文化財調査研究センターにより現在調査が実施されている。

注７　杉本　宏他『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』（宇治市教育委員会、昭和58年）。

注８　柴田　実「宇治古代登窯遺址」（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第14冊、京都府、昭和８年）。

注９　注１に同じ。

注10　小池　寛 氏の教示，注７。

注11　現在宇治市教育委員会が調査実施中。

注12　杉本　宏「土器から見た宇治大鳳寺跡の終焉」（『京都考古』第34号、京都考古刊行会、昭和59年）。

注13　半載ないし半載以下に割りか割れたかは不明。確かに半載したと思われるものも存在するが、大半はその大きさが不均一な瓦片を使用している。

注14　田辺征夫「古代寺院の基壇」（『原始古代社会研究』４、原始古代社会研究会、昭和53年）。

注15　注３に同じ。

注16　奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』（「奈良国立文化財研究所学報」第九冊、昭和35年）。

注17　『平安遺物』第2756号。

注18　注12に同じ。